

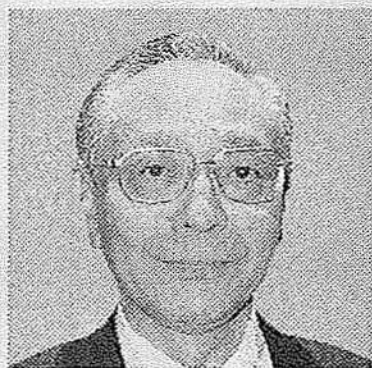
## 千住金属工業

長谷川 永悦 社長

スマートフォンやタブレット時代に入っている。

スマートフォンやタブレットの普及により、部品の微細化が進み、実装工程においても新たな技術が求められる。

コスト競争の中で低銀は加(埼玉県草加市) 関西(兵庫県多可町) 宮崎(千住) はんだは顧客が目的や用途に応じて材料を選択する



点を構え、フラックス、ヤニ入りの、マイクロボールなど多様なはんだ材料を生産している。

海外では中国(北京、上海、惠州)、香港、タイなどアジアを中心に生産を行っている。

## 同一製品の2拠点生産推進 リスク分散 体制構築

東北大震災やタイ洪水・千住金属(惠州)の生産後、生産の分散を求める顧客が増えている。はんだ事業においてリスク分散のため同一製品の2拠点生産を進め、製品群ごとの生産体制を構築している。

宮崎工場(千住技研)において、独自のシリスポーラスガラスを利用した膜乳画法で狭公差高真球度のマイクロボール(ソルダーボール)の量産体制をすでに整えた。

新たに岩手工場でもマイクロボールの生産を始めた。

関西工場ではペースト、フラックスパウダーなどを生産しているが、中国・広東省惠州市の現地製造拠点

・千住金属(惠州)の生産体制を拡充。棒、フラックスに加え、ヤニ入り、ソルダーペースト(パウダー)の生産を始め、同社の一大総合工場に位置付ける。

本から輸入してきた原料や、中間材料の現地調達化

・生産比率を大幅に引き上げた。現地調達・生産することでコスト競争力を高める。

タイは生産を現地のタイソルダーに委託し、ヤニ入りのみ日本から供給している。

長谷川社長は「基本的にローカルのマーケットに即応した地産地消を目指す」と語っている。